

心が育つということ その(3)

幼児の持つ「内ー外」意識の変容をめぐって

豊田 一秀



これまで私は二回に渡って「マージナル」という言葉を中心に据えて、幼児が未知な空間、モノ、人物、といった外界を、どのようにして内なるものに変容させていくのかについて述べてきた。今回は「テリトリー」を一つのキーワードとして、幼児の持つ「内ー外」意識の変容について考えて行きたい。なお次回は「コントロール感」について述べる予定である。

子どもの持つテリトリー意識

テリトリーには、領土、なわ張りと言った訳語が一般的に使われることが多い。それ故に、テリトリーは「所有」という言葉と関係が深い。この所有という側面を強調して考えるならば、この言葉の本来の意味である空間的所有、専有という一面を超えて、物質的な所有、対人間的な所有という面をこの言葉に加えることも可能かと私は考える。空間であれ、物質であれ、また人間であれ、自分のモノであれば、それを他者がみだりに侵すことは許されない。この意味において、テリトリーは私的

な安全地帯としての性格を持ち合わせてくる。子どもは安全地帯に身を置き、自分だけのモノを専有し、操作することによって、その場に臨んだ自分を守り、自分の存在感を得ようとする。エリクソン（一九五〇）はプレイセラピーの基本的条件を述べるなかで「所有」に触れて、子どもが、玩具と大人を自分だけで独占することと、その子の遊びの意図と展開をけっして邪魔しないことの二点を上げている。そして、このことの重要さについて「それを遊びの中で実際に最後まで演じることが子ども時代に許される最も自然な自己治療の手段だからである」としている。

実際の集団生活の場で、子どもがテリトリーを獲得する過程は、単純なものではない。子どもはその過程において、互いにテリトリーを主張しあい、物をとりあう中から、他者と自分が調和する点、すなわち、テリトリーの相互不可侵性という不文律を求めなくてはならない。そして、それが友達と共に生活することの第一歩となるのである。この、ある意味での秩序を作るといふ、子ど

もにとっての大仕事を後から支えることが、教師の大きな役割の一つであって、教師は量的な公平ばかりではなく、質的、心理的な公平という事についても、深い洞察を持たなくてはならない。

その場に対する安心感、安定感といったものが、子どもの中に育ってくるに従って、子どものテリトリー意識は、その内容を少しずつ変化させてくる。

自分だけのモノであった空間に、人を入れられるようになり、自分だけの物を、人と共有できるようになるといった、モノのやりとりが少しずつできるようになってくる。この事は、テリトリーの拡大と共に、その境界線の柔軟化と捉えることも出来よう。

こうしてみると、テリトリーを持つとは、物質的、空間的な所有に始まって、自信、自己存在感といったような、自分の心の財産を持つにいたる一連の過程を含んでいるといえるのではないだろうか。この事を他の言い方で述べるならば、テリトリーを持つということは、人に何かを与えるに先だって、その与える何かを、まず自身

の内に取り込もうとする行為に他ならないと言える。
まず自分自身が人から与えられ、内に取り込んで、後にそれを人に与えていくという過程は、単に物に限ったことではない。信頼、愛情といったような高度に精神的な面においても、同じプロセスがあると私は考える。

(1)空間的なテリトリー

〈事例2-1〉

活動的な子どもの動きの大きな遊びや、散乱したオモチャなどで、保育室は混乱し、落ち着きがない。Bは私の手を取って家に帰ろうと言う。私はBの気持ちに共感でき、しばらく私の膝に乗せておく。少し落ち着くと、Bは近くにあった空のダンボール箱を見つけ中に入る。それを見た他の子が来て、中に入ろうとすると、猛烈な勢いで怒り拒絶する。そしてフロに入ったときのように、ホッとした顔をして、箱の中から十分近く辺りを見ている。

（Y保育園）〈写真1〉

この事例は、入園後、約一月経ったBの様子の一コマ



写真1

である。前の年、一年間、兄の送り迎えについて来ているBは、自分も保育園に行くのを楽しみにしていた。しかし、いざ自分がある中に入ってみると、以前思い浮かべていたイメージと大きくずれる所があったのであろう、日が経つにつれて、登園をいやがるようになってきていた。

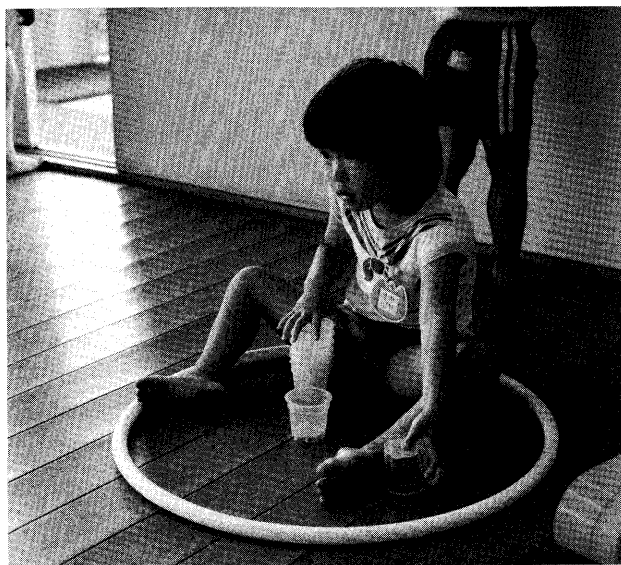
集団の場に初めて身を置いたBにとって、少し誇張すれば、保育室は闘牛場に例えられたのではないだろうか。そしてその中に一人、裸で入れられてしまったような感じが、Bにはしていただろうか。Bはそのような状態の中で、とりあえず自分の身を守るモノが必要だったのではないかと思う。丁度、実際の闘牛において、牛に追われた闘牛士が、安全地帯に逃げ込むのと同じである。その場から自分を守り、隔離する空の箱に身を置くことで、周囲をよく見渡して様子をつかみ、自分を立て直そうとBは努めていたのだと思う。

ここで大切なことは、Bが空箱に入り、そのテリトリーを主張したことを、辺りの子どもが認めたことであ

る。「認めた」といっても、この場面では、他の子どもがその箱に入ろうとするのをBが拒絶し、そのBの様子を見て、他の子どもはその空箱に入ろうとするのをやめた、と言うのが実際の有様である。しかし、言葉によるやりとりが、まだあまりできない、このころの子どもにとっては、ある意味では、このような動物的とも言える非言語的な会話（交流）が意味を持っているのである。

もしも、いくら空箱に入っても、他の子が無理矢理入って来て、自分が追い出されてしまうというような状態が続いたならば、この空箱が、Bにとって、テリトリーとして全く意味をなさないものとなるであろう。テリトリーとは、他者もそれをテリトリーと認めて初めて成立するのである。Bが空箱をテリトリーとして主張し、それを他の子どもたちが了解するということ、すなわち自分の心持ちを通すという一事によって、Bは最も初歩的な、その場に対する自己存在感を持ったに違いない。この事は、後に続く生活にとって、非常に重要な意味があると思われる。

写真2



〈事例2-2〉

Sは、ままごと用のプラスチックのカップをいっぱい持って、保育室の中を歩き回っている。他の子どもがそれをほしがっても、けっして分け与えない。しばらくして、遊具の大きな輪を見つけるとその中に入り、やっと腰をおろすと、そのカップを下に置いて輪の中で遊び始める。

〈Y保育園〉〈写真2〉

Sは、持っているカップを人に取られたくなくて、持ち歩いているのだが、そうしている間は、カップで遊ぶことが出来ないというジレンマに陥ってしまう。そのような気持ちのSの目に止まったのが、白いプラスチック製の輪であったのであろう。この場合、他の子どもとの干渉から、Sを守る力が、実際にこの輪にあったかどうかは疑問である。しかし大事なことは、Sがこの輪を見て、それをテリトリーと感じたことである。この意味では、前の事例における空のダンボール箱も同じである。子どもにとって、閉空間は子どもをそこに誘う何かを持ち、その子どもに安心感を与える力を宿しているように

ある。

〈事例2-3〉

HとKは、椅子で囲んだ空間を作って、その中に二人で入り遊んでいる。そこに男児三人がやって来て、中に入ろうとする。二人の女兒は少し迷惑そうな顔をするが、強くは拒否しない。男児は、次々と本を持ち込んで、中に入っている。

（Y保育園）〈写真3、4〉

この事例の写真を見てもわかるように、その閉空間に共にいる子どもたちも、何か一つの遊びを一緒にするといったような、共通のイメージがあるというわけではない。一人ひとり勝手な事をしているのだが、お互いが相手の嫌がることはしない、というような親近感がその中にある。この親近感は、物理的に身を近くに置いた結果でもある。そして、身を近くに置くことが、また親近感を生むという一つの循環を私は見る。このメンバーは常に固定しているというわけではなく、あまり大人数にならないという一つの法則の下に、日により、時により入

写真3





れ替わっている。〈写真4〉において、右端の子どもが、文字どおり「縄張り」をしているのが興味深い。

〈事例2-4〉

Y、S、Mの三人が園庭で遊んでいる。中に入れるような大きなプラスチック製の遊具が二つしかないのに、Yはスクーターや台車などを使って周りを囲み、持っていたオモチャを中に入れて、一つの閉空間を作り出し、プラスチックの遊具の代わりとしている。

〈Y保育園〉〈写真5〉

この三人組は、仲よしグループである。SとMがプラスチック製の遊具に入っているのに対して、Yも自分で考えて一つの空間を作り、満足している。二つしかないプラスチックの遊具を、ケンカで取り合いをするでなし、誰かのに入れてもらってもないYのその行動に、一人ひとつずつ、家を構えるという、暗黙の了解が感じられる。そして三人で、同じイメージを楽しんでいる。

これまでの四つの事例を比較してみると、色々な点で



▲ 写真 5

興味深い。まず、〈事例 2-1、2-2〉においては、テリトリーを主張することに、遊びの意識は全くない。実質的に自分を守る物として、これらのテリトリーを使っている。自分を自分一人で守るという孤独な戦いでもある。これに対して〈事例 2-3、2-4〉は複数の友達と共に行う遊びであって、一人から数人へ、本気から遊びへと、テリトリーの内容を変化させているといえる。この進歩した活動の形は「ままごと」として、よく見られる遊びである。ままごとは、ある限られた空間を、限られた仲間と共通のイメージを持って、物を専有しつつ遊ぶあそびである。そこには、必死に外に対して自分を守るといふ頑な姿は見られないものの、外に対して内を作り、守るという姿勢は、なお残っている。ままごと遊びの大きな枠組みである家(ウチ)を作るとは、正に内(ウチ)を作ることであって、ままごとがある種の排他性を持つのも、一つの必然であり、ここに、この遊びの効用と弊害が見られる。

(2) 物質的なテリトリ

〈事例 2—5〉

Yは、本棚から本を全部引き出すと、自分の横に積み重ねて、誰にも貸さない。Yにとっては、全ての本を所有するというその事が目的のようで、一冊ずつ手に取って読む気配はない。他の子が来て、二、三冊取って行くと「○○ちゃんいっぱい取ってずるいよ!」と、Yは自分の持っている本の数をよそに、文句を言っている。そして、親しいKが来ると「Kちゃんならいいよ!」と言って一冊分けている。

(Y 保育園)

〈事例 2—6〉

私は、部屋に散乱している粘土を片付けている。するとGが近くに来て、私の様子を見ているので、粘土でダンゴを一つ作って渡してやる。Gは嬉しそうに受け取ると、「もつ」と言うので、私はどんどん作ってGの両手に乗せてゆく。手にあふれんばかりのダンゴを持って、Gはニコニコしている。手からこぼれそうになったので、友達が親

切のつもりで、牛乳パックで作った手カゴに移してやろうと、手の上のダンゴを取ると、Gは泣きそうになる。私はフツと思って、Gの通園カバンに入れてやると、Gは私の膝に乗りつつカバンを持って、ほっとしている。降園時には、本当にそのダンゴを持って帰ってしまう。

(Y 保育園)

両事例とも、モノを手もとに集めようとしている子どもの姿が見られる。この子どもたちにとって、それが何の役に立つといったような実際の実用性よりも、量そのもの、すなわちたくさん手の中に入れることこそが意味を持っているのである。もちろん、量さえあれば手に持つものは何でもよいという訳ではない。

この場合、Yが手もとに集めたのは本である。まだ字が読めない三歳のYにとって、本とは、大人が自分の(あるいは、自分たちの)ために読んでくれる物である。それ故、一冊の本には、内容は読めなくとも、「楽しい時間」が内包されている、価値あるモノなのである。

Gの場合の粘土は、私が作ってやった物である。Gに

としては、私からのプレゼントとしての意味あいがあったのだと思う。

(3) 対人間的なテリトリー

子どもの対人間的なテリトリー意識は、ある人物に対する独占という形をとる場合が多い。「ほくのお母さん、わたしの先生」を求める子どもの姿は、日常よく見られるところである。親や教師の存在は、特に幼い子どもにとって、大人自身が考えているよりも大きいことが多い。信頼する（自分にとって内なる）大人を独占できたと子どもが感じられたとき、その子どもは、自信に満ち、喜びにあふれた輝いた者となり、子どもにとっての周囲の世界の見え方は、全く異なったものとなるからであらう。

〈事例2-7〉

保育園において、他の子どもが、私の膝に乗ろうとする
と、家庭児Bはひどく怒る。またBの選んだ本を読んで

やっていると、他の子どもと一緒に読もうと近づくと、その本を閉じてしまい、見せようとしな

（Y保育園）

家庭児Bにしてみれば、集団の場において他の子どもが、自分の父親と親しく遊ぶことは、自分の父親を取られたようで面白くないのだろう。家にいる時のような父親を保育園においても求め、私を独占しようとしている。それはまた、他の子どもに対して、自分のテリトリーの主張でもある。

次に、このような言葉による主張ではなしに、象徴的な遊びに現れた対人間的な独占について（ヒモを使った遊び）を中心に、三つの事例に添って述べてみたい。

ヒモは子どもの好むモノの一つである。ヒモはもっとも素朴な道具の一つであって、物と物を結わえたり、縛りつけたりする事が出来る。ヒモは「縄張り」「束縛」という言葉にも現れているように、所有という事と関連が深い。言語以外のもので自分の思いを現す子どもは、時にヒモで人を所有しようとする事が見られる。

的な部分であろう。

〈事例 2-8〉

私が、保育室のイスに座っていると、縄とびのヒモを持って来て、私の両足をグルグル巻きにして「もう、逃げられないぞ!」と言って喜んでゐる。

(Y 保育園)

〈事例 2-9〉

Y、S、A の三人は、保育室に來た私を見つけると、飛んで来て、三人で私の足にしがみつき離さない。

(Y 保育園)

足をヒモで縛り付けたり、足にまとわりつく子どもは多い。足の自由を束縛することは、相手をその場に留まらせる事である。実際、私も両足にしがみつかれると、その場に留まらざるを得なくなる。子どもにしてみれば、そこに相手を留めておきたいという気持ちと共に、私の足と同化する事で、一緒について行くという無意識の思いがあるのかもしれない。考えてみれば、手と腕は、しがみつき、からみつき、体の中でもっともヒモ

〈事例 2-10〉

大好きな実習生を、五、六人の男児が追いかけまわし、とうとう逃げられないように木に縛りつけてしまい、大喜びしている。

(O 幼稚園)

これらは、いずれも遊びという形をとりつつも、ヒモを道具として相手を束縛し、所有しようとする、一種の象徴的な遊びであると言える。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

— 参考文献 —

Erikson, E. H., 1950 "Childhood and Society" W. W. Norton, N. Y.

(仁科弥生訳一九七七、一九八〇幼児期と社会 I・II
みすず書房)